戸澤哲夫 ヴァイオリンリサイタル

～ベートーヴェン後の燦爛（さんらん）～

6回シリーズ最終回

加藤良一　2024年9月4日

9月1日、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスターでもある戸澤哲夫さんのヴァイオリンリサイタル～ベートーヴェン後の燦爛～最終回を聴いた。最終回は各地で5回の公演が組まれていた。

サンワックスホール　スペースU古河（茨城県）　9月1日（日）

1. F.A.E.ソナタ　イ短調　　シューマン・ブラームス・ディートリヒ作曲
2. 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ　第2番　イ短調　BWV.1003　　J.S.バッハ作曲
3. ヴァイオリンソナタ　イ長調　K.12　　W.A.モーツァルト作曲
4. ヴァイオリンソナタ　第3番　イ短調　WoO.27　　R.A.シューマン作曲

戸澤哲夫　　ヴァイオリン
小川由希子　　ピアノ
香月圭佑　　チェロ

戸澤哲夫さんは、東京藝術大学大学院在学中の1995年、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスターに就任、現在もその重責を果たしている。

全国でのリサイタル活動に加え、東京シティ・フィルはじめ東京フィルハーモニー交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、日本センチュリー交響楽団、広島交響楽団などと共演を重ねている。

現在、BSテレビ東京で毎週土曜8時半から放映されている音楽番組「エンター・ザ・ミュージック」のレギュラー・カルテットとして結成されたThe 4 Players Tokyoのリーダーも務めている。「エンター・ザ・ミュー

ジック」は、昨年3月スタートした指揮者藤岡幸夫さんが進行役を務める人気の番組である。

ベートーヴェン後の燦爛（さんらん）

戸澤哲夫さんは、「ベーヴェンで確立されたヴァイオリンソナタをその後の作曲家が如何に発展させたかを、その直系ともいえるシューマンやブラームスのドイツ・ロマン派に、フランクやサン・サーンス、さらにはドビュッシー、ラベルといったフランス近代にも広げた」系譜をシリーズとして2018年にスタートさせた。

途中、コロナ禍で開催できない期間もあったが、今回締めくくりとなる第6回を迎え、最後に相応しく、シューマン・ブラームス・ディートリヒの3人の作曲家による合作「F.A.E.ソナタ」※を第1ステージに据え、さらにこの曲を土台にシューマンが作曲した「ヴァイオリンソナタ　第3番」という演奏機会のすくない作品を第4ステージに並べた。

また一方、リサイタルでは欠かすことができないというバッハの作品から「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ　第2番　イ短調」を第2ステージに配置した。個人的なはなしで恐縮だが、社会人として給料を得るようになって二番目に買ったレコードがヨーゼフ・シゲッティのこの無伴奏ソナタであった。一番目はピール・フルニエの同じくバッハ「無伴奏チェロ組曲」であり、それほど当時はバッハに傾倒していた。

第3ステージでは、ゲストのチェリスト香月圭佑さんを交え、モーツァルトが11歳のときに作曲したという「ヴァイオリンソナタ　イ長調」が演奏された。

※　F.A.E.ソナタ　イ短調　　シューマン・ブラームス・ディートリヒ作曲
https://www.youtube.com/watch?v=LTYG8kRk_VA

シリーズ名「ベートーヴェン後の燦爛」の「燦爛（さんらん）」とは、光り輝くさま、華やかで美しいさまという意味で、ベートーヴェン以後の燦然と輝く時代を表現したもの。

今回のリサイタルで個人的に印象に残ったのは、バッハの無伴奏ヴァイオリンソナタだった。精神性あるいは神性を感じさせるバッハの世界感に満ちた素晴らしい演奏であった。この曲だけは暗譜での演奏だったが、バッハの無伴奏に限っては当然のことかも知れない、と思った。

余談だが、今回の「スペースU」（茨城）公演の前の8月埼玉県鴻巣市の「花久の里サロン」における公演では、折しも天候が悪く、雷鳴轟く中でバッハの無伴奏ヴァイオリンソナタを演奏したという。「花久の里」は、地方の旧家の佇まいを残したサロンで、大きなガラス窓からは庭が望めるという自然な環境だから、雷鳴はそのまま会場に響き、「無伴奏」ではなくなったというオチであった。

今回の「ベートーヴェン後の燦爛」シリーズはこれでいったん締めくくりとなったが、ヴァイオリンという楽器が紡ぎ出す大きな世界に向かって新たな構想を描いてゆくと、リサイタルの最後に挨拶された。今後のシリーズに期待したい。

ヴァイオリン 戸澤哲夫 ｜ 音楽教室 マエストローラ音楽院
https://www.maestrora.jp/room/room2.html

【参考：Wikipediaより】

● F.A.E.ソナタ（*Sonate F.A.E.* [*Frei aber einsam*]）：

1853年にドイツの作曲家であるロベルト・シューマンが友人アルベルト・ディートリヒとヨハネス・ブラームスとともに作曲したヴァイオリンソナタ。3人の共通の友人であるヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムに献呈された。1935年出版。

曲名のF.A.E.とはヨアヒムのモットーである「自由だが孤独に」（*Frei aber einsam*）の頭文字をとったものである。ドイツ音名のF・A・Eはそれぞれイタリア音名のファ・ラ・ミに対応し、この音列が曲の重要なモチーフとなっている。このような手法をシューマンは好んでいたらしく、『アベッグ変奏曲』（A-B-E-G-G）やピアノ協奏曲（C-H-A-A ⇒ Chiara = Clara）などで用いている。

ちなみにブラームスは、ヨアヒムのモットーに対応する「自由だが楽しく」（*Frei aber froh*）をモットーとしており、この略に対応するF-As-Fの音列を交響曲第3番で用いている。

初演は1853年10月28日にシューマン邸で、ヨアヒムとクララ・シューマンによって行われた。シューマンらは各楽章の作者を伏せていたが、ヨアヒムはすぐに当てたという。

ヨアヒムは楽譜を手元に残し、1906年になってブラームスの楽章の出版のみ許可した。全曲の出版は、ヨアヒムの死後の1935年になってからである。

現在では、ブラームス作曲のスケルツォがたまに演奏されるだけで、全曲演奏の機会はほとんどない。

● シューマン　ヴァイオリンソナタ第3番：

シューマンはF.A.E.ソナタの初演翌日の10月29日から11月1日までの4日間のうちに、新たに2つの楽章を作曲して第1、第2楽章とし、先に作曲した2つの楽章を第3、第4楽章として新たな4楽章のヴァイオリンソナタを完成させた。ヨアヒムは追加した楽章が元の楽章と調和していると評価し、元のソナタとは別の作品であると述べている。しかし、このソナタはその後は注目されず、全集にも収録されなかった。「ヴァイオリンソナタ第3番イ短調 WoO27」としてショット社から全曲が出版されたのは、シューマン没後100年を迎えた1956年である。なお、近年は第2楽章と第3楽章を入れ替えて演奏する場合がある。

Back
音楽・合唱コーナーTOPへ

Home
Topページへ戻る